

「ジャン・クリストフ」と芥川龍之介（一）

五島 慶一

【はじめに】

青年期の芥川龍之介がロマン・ロラン「ジャン・クリストフ」(Romain Rolland “Jean-Christophe” 1904～1912)に深い感銘を受け、その後の作家としての自我形成にも強い影響を与えたであろうということは、斯界では広く認識されているところである。しかし、そのような印象が共有され、作家・作品を語る上での既成材料としてしばしば利用される一方で、その射程範囲の実際、具体的に例えば芥川はいつ頃どのような影響をどの程度の強度で受けたのかや、それをいかなる形で自身の作品の形象化へと反映したのかという点に関しては、上記認識に比すと思いのほか明らかにされていないように思われる。

以下の論稿は、芥川が「ジャン・クリストフ」とどのように関わり、同作及び作者ロマン・ロランについて（書翰上など非公表のものも含めて）どのように言及していたのかを整理し、それら対象と芥川の距離（の変遷）を測るのを目的とするものである。

初めに、『芥川龍之介全集』（岩波書店 一九九五～一九九八）から、第二十四卷所収「引用作品索引」（石割透編）「人名索引」（篠崎美生子編）を利用して「ロラン、ロマン」「ジャン・クリストフ」への言及を総て抽出し、発表・執筆順に並べ変える作業を行った。本稿では年譜的な構成も意識し、一部で項目簡潔書き的な表記を採用している。その際、芥川による文章のタイトルは太字とし、書翰（第十七～二十巻収録）については前掲全集の（書簡番号）をも記した。また、

それ以外にも、（確認できる限り）芥川が「ジャン・クリストフ」に接するより以前の邦訳や第四次『新思潮』後記におけるロランに関わる言及など、彼を取り巻く周辺環境の中から事項として重要と思われるものを適宜抜粋・紹介し、コメントを付して提示する。芥川と「ジャン・クリストフ」あるいはロマン・ロランとの関わりを、間接・可能性的なものも含めて時間軸に沿って呈示することが本稿の意図である。

【本篇】

○ 一九一三（大正二）年三月 高村光太郎訳「反逆（ジャン・クリストフ）——ロマン・ロラン——」が『フェウザン』第四号にて連載開始。同誌（四月は休刊）五・六月号、その後は掲載誌を『生活』に移して七月（第九）号に掲載された。¹ 第四巻「反抗」（*La Révolte*, 1907）の部分訳ながら、「ジャン・クリストフ」邦訳としては初の公刊である。² 初回掲載の『フェウザン』第四号の後記「消息」（「S・K」の署名は木村莊人か）には、高村光太郎の手紙が転載されている。その中には以下のような記載がある（二月二十二日附はがき。傍線引用者、引下同）。

私は今クリストフを訳しながら激昂してゐます。クリストフの心理状態をよく了解出来るからだとおもひます。私は此を訳す事を喜んでゐます。其の純仏蘭西な魂も私を躍らせます。

クリストフはドイツ・ライン川沿岸の小都市出身で、後に接することになったフランス社交会の浮華軽佻ぶりを痛烈に批判している。そんな彼の物語を傍線部のように捉える高村の理解の浅さは井口一男が別の根拠を挙げて指摘するところながら、「ジャン・クリストフ」がこの後日本の比較的若い世代を中心に熱意を以て迎えられる先駆としてみ

ることができよう。訳出開始時、高村は満二十九歳、芥川の九歳年長である。これらの文章や次項の三浦閑造訳書と芥川との直接の接点は確認できないものの、（先輩たち）の熱狂がすぐ前に先行してあったのであり、あるいはどこからかローランや「ジャン・クリストフ」について聞く機会がなかったとは言えないだろう。

○大正三（一九一四）年六月　ロマン・ローラン作、三浦閑造訳『闇を破つて　ジャン・クリストフ』（警醒社書店）刊行。その「自序」より引く。

○クリストフとは、仏国の若いローランと云ふ芸術家の書いた小説で、前後十巻に分れて居りますのを、私は前二巻、即ち「曙」と「朝」と題したのを一巻として出し、「闇を破つて」と題します。残部は三巻にまとめて、引き続き出版する事になります。其の中にはローラン君の書簡をも発表する事になります。

○ローラン君は今ソルボンの大学で非常な興趣のある音楽史の講義をして居ます。「人生の新趣味である。二十世紀の最も高貴な傑作である」と西洋の有名な評論家が激賞したジャン・クリストフを茲に訳して読者に献じます。

三浦はこの前に、『ジャン・クリストフ』に対するかなり熱い思い、それが現代の社会的風潮に対して對抗的な意味を持ちうる芸術的精華たることを強調して語っている。ただ、傍線部の紹介の仕方からは、それが未だ日本の読書界には十分に浸透していないという現状認識もが看取される。それゆえに、それを広めたい、という思いは少し後の成瀬正一などと同様だろう。

尚、予告した続編・書翰などの翻訳は、少なくとも単独著書としては出版されなかったようである。

164 大正三（一九一四）年十一月十四日附 原善一郎宛

「此頃はロマン・ロオランのジャン・クリストフと云ふ本を愛読してゐます」とあり、その前段にはマチスを例に「僕の求めてゐるのはあゝ云ふ芸術です日をうけてどん／＼空の方へのびてゆく草のやうな生活力の溢れてゐる芸術です其意味で芸術の為の芸術には不賛成です此間まで僕のかいてゐた感傷的な文章や歌にはもう永久にさやうならず」と述べている。確認される限り芥川自身による最初の言及であり、感化の始発点とみてよいだろう。この時点での芥川は東京帝国大学英文科に在籍する二十二歳（満年齢）、短歌や翻訳以外の創作としては「老年」（同年五月『新思潮』）と習作戯曲「青年と死」（同年九月、同誌）があるのみで、未だ作家として立つ——その具体的な方途を思い描いていたとは言い難い。

171 大正四（一九一五）年二月二十八日附 井川恭宛

少し前に「ロランに導かれてトルストイの大いなる水平線が僕の前にひらけつゝある時」があつたと述べる。

・大正四（一九一五）年四月九日

ジルバート・カナン英訳本で「ジャン・クリストフ」を読了か（注4参照）。

○ 大正四（一九一五）年六月五日。内藤濯『ロマン・ロオランの思想と芸術』（天弦堂 近代思潮叢書第七編）刊行。
 ※ ほぼ全編に互つて「ジャン・クリストフ」を参照・引用しながらロランの思想と芸術について語つたものであり、同時にそれは著者自身の強い熱意と共感に基づいて出されたものであることが、例えば次に引く「はしがき」などが

ら見て取れる。

ロマン・ロオランの芸術には、新しき世界に生きんとする人々にとつての多くの問題が含まれてゐる。彼れの芸術、わけても『ジャン・クリストフ』十巻の物語を読む人々は、そこに愛に飢ゑ真理に渴してゐる人間の惨ましい、しかし花々しい一生を見出だすであらう。敗戦の苦痛を擺脫しようとして、腕きにもがいてゐる一民族の象徴を見せつけられるであらう。一人の心に生かされてゐる万人のこゝろ、個人のいのちの中に生かされてゐる社会の生命に接触するであらう。ことに旧き世界の一切を苦しむことによつて、新しき世界に生きようとするロマン・ロオランその人の純真な態度は、新旧の著しい分界線に立たせられてゐる吾々自身の問題に対して、大きな或る物を暗示せずには措かない。

185 大正四（一九一五）年六月二十九日附 井川恭宛

※ 『ジャン・クリストフ』を、同じくロラン著の『ミケランジェロの生涯』（一九〇六）『トルストイ伝』（一九一一）と共に人に貸して手元ない由。

190 大正四（一九一五）年八月十申附 山本喜誉司宛

「この頃ロマン・ロランのトルストイをよんで非常に感激した」「僕は此頃しみじみトルストイの大いさを思ふ」とあり、書翰171と併せて、書翰執筆の時点（後述）ではロランを通じてではあるが、興味がトルストイ（自体）の方に移りつつあつた様子が見られる。尚、同年七月、第四次『新思潮』刊行資金工面のため、同人で分担してロラン『ト

ルストイ伝』(前掲)を翻訳することになった。

又、「すべての偉大な芸術には名状する事の出来ない力がある その力の前には何人もつよい威圧をうけるそしてその力は如何なる時如何なる処にうまれた如何なる芸術作品にも共通して備はつてある 美の評価は時代によつて異つても此力は異らない 僕は此力をすべての芸術のエッセンスだと思ふ そしてこの力こそ人生を貫流する大なる精神生活の発現だと思ふ」とも書翰冒頭近くで述べており、書翰164で述べていたような芸術観、自らの到達すべきとその時点で設定されている地平と継続しているとみられる。

本書翰は従来全集では八月一日附とされてきたが、前掲『芥川龍之介全集』第十七巻の第二刷(二〇〇八年五月発行)で年推定・月日不明と訂された。詳細は今後の研究進展を待たねばならないが、ひとまず後述する根拠から発信日はそれより五か月程度遡つて書翰171に近い時期でないかと思われるが、全集〈書翰番号〉によつてここに配する。

まず、一九一五年一月刊行の永井荷風『夏すがた』(靑山書店発行。芥川は「夏姿」と表記)を「あのかへりに電車の中で皆よんでしまつた」とあることと、「Y」≡芥川の初恋の相手とされる吉田弥生への未練が語られることから、その年のものであることは間違いない、それも比較的早い季節のではないかと思われる。日付の確定している現存書翰で彼女に言及しているのは五月のが最後である。その話題との関聯で、本書翰では宛名人・山本からすれば姪にして後に芥川の妻となる塚本文に対して「文子女史」とやや距離をおいた呼称を用いている。同年五月二日附山本宛書翰178では同人を「文ちやん」と呼んでいること(婚約後は本人宛にも使用)からも、これはそれより前のものと推察できる。更に、二伸に「そのうちに稲荷祭を見せて貰ひにゆくかもしれない」との記述がある。「稲荷祭」は京都伏見稲荷大社の祭礼が有名だが、ここでは各地(山本宅近所?)の稲荷神社で旧暦二月の初午の日に行われるものを指すか。その場合もやはりこの書翰の発信は同年三月頃までと考えられよう。

○第四次『新思潮』創刊号 大正五（一九一六）年二月十三日印刷 十五日発行 「編輯後に」より

近い中に成瀬の訳で新潮社からロマン・ローランのトルストイ伝が出る。所謂「流行」などに促進されて出すのではないから、偏見なく右の訳書を手にとつて貰ひ度い。一頁読めばひきつけられずにはゐないから、内容の広告はしなくてもよい。（以上五人を代表してK）

※ 成瀬正一訳・ロラン著『トルストイ』は翌月発行された（注6参照）。この項代表筆者の「K」とは久米正雄であろう。同人中もう一人Kのイニシャルを持つ菊池寛——このときは「草田杜太郎」の名で「暴徒の子」を寄稿——は当時京都在で、手紙と共に原稿を送つてきていたことが同じ欄に久米の言において語られている上、第三号後記でも、こちらは明らかに久米によるとわかる記事が「K」のイニシャルで載っている。

ここでいう「流行」の対象は、著者ロランと素材であるトルストイ自体、どちらであるとも取れる。そうした世間的な風潮と自分らの間には差異があることを強調したいのだろうが、しかしそのような言及自体が、彼ら『新思潮』同人を含む当時の青年たちの間に、（対トルストイはもちろん）ロラン熱とでもいうべきものがあつたことを示すことになる。「以上五人を代表して」の言が決して「K」の独断でないことは、芥川190書翰や、これ以降の『新思潮』後記におけるロランへの言及が連続すること——とりわけ第三号の言及において明確である。

○『新思潮』第二号 大正五（一九一六）年三月十七日印刷 四月一日発行 「編輯の後に」より

成瀬の訳したロマン・ローランのトルストイ伝は、此雑誌が市に出る頃には出るだろう。

※ この項目は無署名。前号に続く言及である。尚、「今月から発行日を一日にした。併し事實は前月の二十日前後に市に出せる。」という注記が同じコーナーにあり、成瀬訳書の発行日が三月十八日（奥附）なので概ね事実に沿っている。

○ 『新思潮』第三号 大正五（一九一六）年四月二十六日印刷 五月一日発行 「編輯の後に」

成瀬のところに来た ロマン・ロオラン氏の書簡によると、氏がノーベル賞金を貰ったと伝へられたのは虚だといふことである。多くの新聞や雑誌には皆間違つた報知が一時伝へられてゐたやうだから、老婆心までにこゝに書いておく。次号あたりに、氏から成瀬にあてられた四五の手簡を、成瀬から載せて貰ふことになつてゐる。一人に宛てられた手紙ではあるが、それが同時に、吾々全部の青年に与へられたものと見ることが出来るからである。

※ この部分の執筆者は松岡譲である。傍線部などは、先に述べた汎青年的「ロラン熱」の存在を強く感じさせる一節とみてよい。ノーベル賞金云々のくだりは同誌第四号に載つた成瀬訳「ロオラン氏の手紙」第三信（一九一六年二月十四日附）にある「貴下は、ノオベル賞金のことに關しては、ちつとも気にかける必要はなかつたのです。其後、虚伝であつたことがお分りになつたでせう。……………そんなものを貰つたからと云つて、私及私の労作に何の変化が起ることとせう。こんなことの成不成に重きを置かないやうにして下さい。」という部分を受けたものと思われる。実

際ロランに対するノーベル賞授賞はこの前年から取り沙汰されており、十一月には『ニューヨーク・ヘラルド』の虚報をきっかけに受賞の噂が広まったという。結局、一九一六年十一月九日、世界戦争による混乱のために延期されていた一九一五年度ノーベル文学賞がロランに、一九一六年度同賞（スウェーデンの作家ヴェルナー・フォン・ヘイデンスタムへ）と同時に授与されることとなった。⁷

○『新思潮』第四号 大正五（一九一六）年五月二十六日印刷 六月一日発行

成瀬正一「ロオラン氏の手紙」（表紙目次では「ロマンロオランの手紙」）が巻頭に掲載。因みに芥川「酒蟲」が続いて載っている。以下は前者からの引用。

此所に掲げてある三つの書翰は、ロマン・ロオラン氏が私に宛て、送られた私信である。個人に宛てられた私信を發表することは、躊躇しないでもなかつたけれども、五月号に云つてあるとほり、これ等の手紙は、私一人ではなく、吾々青年全体に対して与へられたものと見ることが出来るので、思ひ切つて載せることにした。恐らくロオラン氏もこれを許して下さるだらうと思ふ。併しあまり個人的な部分を訳出することは、ロオラン氏及讀者諸氏に対しても、礼を欠くことと思つたから、さふ云ふ所は遠慮なく省略した。

なほ一言したいのは、私が、ロオラン氏の著作をたのしむ者として、自ら選ばれた者であると自惚れてゐる様に誤解されたくないと思ふことである。私はある人達の様に、著者が自分一人のために書いてゐるやうなことを云ふのは大嫌である。大芸術家なるものは、ロオラン氏の手紙の中にも云ふ如く、決して選ばれた少数者のために労作するのではなく、全人類のため、あらゆる同胞のために働いてゐるのであるから。それゆえ私は、ロオラ

ン氏を自分一人で専有しやうとする如きことは、決して思つて居ないのである。私はただ此の書信を読んで下さる読者諸氏が、共にロオラン氏の人格の中に崇高なる光を認めて、共にそこから生きゆくべき力を獲られることを衷心から希望するのである。こんなことは云はないでも解つてゐることであるけれども、私は先日ロオラン氏の『トルストイ』を翻訳し、今又私信を公表するのであるから、或は右のやうな誤解を受けないとも限らないと思つて、予め一言断はつて置く次第である。

※ 傍線部は前号での松岡の言とも重なるもので、引き続き第四次『新思潮』誌面における汎青年的熱度の存在を裏付ける。一方で、波線部は比較的素朴(ナイーブ)かつ熱心にロランへの感動・傾倒を語る成瀬の、同人の中での突出ぶりを示すものとも見える。そのことは例えば同号後記「校正後に」において、他の同人らが「酒蟲は材料を聊齋志異からとつた。原の話と殆變つた所はない。」(芥川)や「砲兵中尉の後篇は其中に載せる。併し前篇だけ切り離して見ても差支ないものである。」(松岡)など、自作に関する簡潔な注のみを記しているのに対し——勿論、この号の編輯担当であつた(後記から推察)ということもあるが——次の如き成瀬の思い入れは彼らとの温度差を感じさせる。

ロマン・ロオラン氏のベエトオフエンの序に、『私の偉人叢書は野心家の傲慢のために書いたのではない。不幸なる人々に捧げるために書いたのである』と書いてあるが、私はこれを読んだ時、胸に答へた。何となれば私は、自らそれを意識しない中にも、可成り野心家で且つ傲慢であるからである。併しこの言葉は、私に対してばかりではなく、ある一部のロオラン氏崇拜者に対しても、痛快な皮肉のやうな気がする。(以上成瀬)。

◎「創作」『新思潮』第七号 大正五（一九一六）年八月二十八日印刷 九月一日発行

※ 末尾に「二九、八、五」と脱稿日の記載があり、同年八月十九日を指すかと思われる。

「創作」は、友人の「君」を前にした「僕」による一人語りという設定の小品である。「僕」は「職業に逐はれて、ペンをとる暇がない」一方、自身が「想像でつくり上げ」た「小説らしい事実」を「友だちの小説家」らに話した結果、それが作品として世に出た例が「十や二十はある」と云う。作品は次の「僕」の言で終わる。

まあ、そんなむづかしい顔をするのは、よし給へ。それよりその珈琲でものんで、一しよに出かけよう。さうして、あの電燈の下で、ベエトオフンでも聞かう。ヘルデン・レエベンは、自働車の音に似てゐるから、好きだと云ふ男が、ジャン・クリストフの中に、出て来るぢやあないか。僕のベエトオフンの聞き方も、あの男と同じかも知れない。事によると、人生と云ふものの観方もね。……………

翌月の雑誌アンケート回答（次項）に先立ち、公刊されたものにおいては初めて「ジャン・クリストフ」の名を出した芥川の文章として注目に値するが、物語的には必然性を欠いて唐突、かつ「ジャン・クリストフ」からの（引用）と見るには問題の多いこの言及は、¹⁰同部分を含むこの作全体が示す初期芥川の創作態度を考える上で重要な示唆を与えてくれるものと考えている。そもそも「創作」という題のつけ方からして意味深長であるが、より以上の考究は別稿に譲る。

◎「ジアン、クリストフ」 大正五（一九一六）年十月『新潮』

「余を最も強く感動せしめたる書に就きての記憶と印象」というアンケート記事への回答として。有島武郎ら二十九名と共に掲載。

※ 初読から二年近くが経ち、当初の印象も「幾分の修正を経た」とは言っているものの、この段階でも「この頃読んだ本の中で」最も感動したものととして挙げている。また、「読んである合間々々には、よく日本の文壇の事を考へた」「あの中に書いてある仏蘭西の文壇のやうに、日本のそれも、より多くの新鮮な心もちのいゝ空気が必要だと思ひ思ひしたものです。」と感想を述べているが、同作で描かれている（問題とされている）のは、主にクリストフの関わる同時代楽壇のことであつて、「仏蘭西の文壇」についてはそれほど多く書かれているわけではない（クリストフ自身、文学にそれほど深い理解があるわけではない、と自認している）。にも関わらず、ここで「文壇」と芥川の中で読み換えられているのは、彼がそこに自らの芸術を強く投影し、自身の（将来的に）身を置く場所・自らの身の振り方に引き付けて考えていたからだと言えるだろう。

○『新思潮』第九号 大正五（一九一六）年十月二十八日印刷 十一月一日発行

成瀬正一「紐育より」（目次では「北米通信」と附記、本文表題には「(一)」として「亜米利加の文壇―劇場―美術館」の副題を附す）から一部抜粋

私は先日市中のある大きな店へ行つた所が、ロマン、ロオラン氏の「乱闘の彼方に」が、沢山重ねてあつたのを見て吃驚した。人はそんなに驚くにもあたらないと云ふかも知れないが、私は可也意外な気がした。それは私の

周囲を取り巻いてゐる亜米利加人の性質と、どうも調和しないやうに思はれるからである、併し私は嬉しかつた。ロオラン氏の書いたものの中でも、氏の最も切実なる叫であるこの本が、多くの亜米利加人に読まれてゐることは、國中錢勘定にばかり狂奔してゐる下に、何所かに真摯な心を持つて、偉大な声を求めて止まない人がゐることを示してゐるからである。無論この本を読む人の中には、好奇的興味を以て、戦局を眺めるやうな態度で読む人もあるかも知れないけれども、中には、悲惨な歐洲戦争によつて起された氏の熱烈なる叫を通じて、真面目に人道に対する解決を求めやうとする青年も少くはあるまいと思はれるからである。その上この書は、近頃、ある亜米利加の青年の手によつて英訳されて、シカゴの某書店から、ABOVE THE BATTLEと云ふ題で、発行されたのである。私は一時も早くかう云ふ人達と手を握り度く思ふ。私が亜米利加へ来たのは、若い熱烈な人と接するために外ならないからである。

私が今迄遇つた人は、皆仕様のないやうな人ばかりである。恐らく私は、自ら文士と称してゐる人達（こつちの人は WRITER と云つてゐる。）とのみ話したためかも知れない。何となれば、真に真面目に生きて行かうとする人は、自ら「自分は文士だ」と意識して、特種な境地に住んでゐるやうな人ではないからである。ロオラン氏の語を借りれば、「人類を超越して、自分の芸術と理智の玉座に座してゐる、かの傲然たる天才」でもなく、又吾偉大なるトルストイの云ふ如く、「オリムピヤの高きに座してゐる徒」でもないからである。

併し一概に「仕様のない人」と云つて罵り去るのは、丁度、訳もなく「偉い人」と云つて賞讃するのと同じく、共に根底のない言葉であるから、私は、報告旁々、私が経験したことを書かうと思ふ。

※

この号にはアメリカ留学のために暫く誌面から消えていた成瀬からの寄稿が二本載っている（もう一本は小説「航

海」)。特に自身の見聞からくる感想ではやはり変わらぬロランへの熱い傾倒ぶりが示されており、同一誌面の中でも次に引く後記に見られるような他の同人たちの関心や態度、すなわち、外部からの寄稿を募集するなどの新機軸を企てつつ頒価値上げを匂わずなど雑誌経営への腐心を語り、もう一方では文壇動向への目配りから自身らの位置づけを図る狙いが透けて見える在り方との温度差・落差が感じられる。ここには久米のそのような言がないが、彼はこの前後の号の後記において、同様の狙いを隠すことなく他の誰より強く、またより感情的な発露として表現している。

□ 十月中旬北海道へ旅行した久米は、いづれ近い中に帰京するだらう。彼地から本誌の「村の火事」以外に新潮に「銀貨」を、帝国文学に「選任」を寄せた。

□ 芥川の「煙管」が新小説十一月にのる。

□ 菊池の「文芸東西往来」¹¹はこれから毎号続いて出る。

（「以上松岡」とあるうちから抜粋。この前に記載される、今後の雑誌の方針に関しても同者著）

□ 同人は皆、非常に自信家のやうに思ふ人があるが、それは大ちがひだ。外の作家の書いた物に、帽子をとる事も、随分ある。何でもしつかりつかまへて書いてゐる人を見ると書いてゐる事は暫く問題外に置いて、つかまへ方、書き方のうまいのには、敬意を表せずにはゐられない事が多い。（さう云ふ人は、自然派の作家の中にもゐる。）傾向ばかり見て感心するより、かう云ふ感心のし方の方が、より合理的だと思つてゐるから。

□ 褒められれば作家が必よるこぶと思ふのは少し虫がいい。

□ 批評家が作家に折紙をつけるばかりではない。作家も批評家へ折紙をつける。しかも作家のつける折紙の方が、

論理的には余程意味があると思ふ。批評の中の論理的な部分は、客観的にも 正否がきめられ得るから。（以上芥川¹²）

△田山花袋氏が十一月の文章世界で芥川の「手巾」を評して何処が面白いのか分らんと云った、夫は僕達が田山氏の作品を読んで何処が面白いのか分らぬと全く同じだ。ゼネレーションの相違は如何ともしがたいものだ。（菊池）

※ 前の引用における成瀬の文章の中で、そこにおいて批判されている「私が今迄遇つた」「仕様のない人」は、文脈から渡米後の事を言っていると見られ（因みに、副題は編輯側、恐らく松岡に拠つて附けられたものであることが後記を見るとわかる）、成瀬にもその意識はなかつたであろうが、結果的にはその頃において「文士と称し」得る位置に就こうと焦つていた他の同人らに跳ね返る表現である。今回の主題からは外れるが、その後まもなくの予告なしでの雑誌廃刊とそのような事態に対する成瀬の怒りにも繋がるものと言えよう。実際、その際の成瀬の怒りの要点は、他の同人らが文壇系雑誌に顔を出すことができるようになったからと言って『新思潮』を捨てるかのような態度を見せたことであり、それは逆から言えば、自らの身は海外にあって同誌以外に拠るところのない彼の取り残され感から発したものと見て間違いない。

○ 大正六（一九一七）年一月二十五日 泰西近代名著文庫『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）
第一巻 発行（同月二十二日印刷）

※ 全六巻、日本初の全訳となる。最終巻は翌大正七（一九一八）年三月八日発行

○ 大正六（一九一七）年五月二十六日 『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）第二巻 発行（同月二十三日印刷）

○ 大正六（一九一七）年七月二十五日 『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）第三巻 発行（同月二十二日印刷）

◎ 「私の文壇に出るまで——初めは歴史家を志望——」 大正六（一九一七）年八月『文章倶楽部』

※ 回想の中ながら、この時点でも「甚く感動させられ」たものとして「ジャン・クリストフ」を挙げている。文章の趣旨から、（芥川自身は、「今日まで作家になることも、ならないともつかずに小説を書いて来た」と明瞭な自認を避けてはいるものの）現在の位置に着くまでに読んだものを挙げている中で出てきたタイトルのうちで肯定的な評価を与えられているのであるから、やはり自らの芸術観を組み上げる上で有用・影響を受けたものと見做すことができるだろう。因みに、「中学から高等学校時代」すなわち思想形成期に読んだ同じく「西洋のもの」では「ツルゲネーフ、イブセン、モウパッサン」の名が挙がるが、これらは「当時の自然主義運動によつて日本に流行した」という前書きがあり、しかもそれらを「出鱈目に読み獺つた」とされて、「途中でやめるのが惜しくて、大学の講義を聴きに行かなかったことがよくあつた」とされる「ジャン・クリストフ」とは位置づけに大きな差がある。

尚、この前後の時期における言及集中には、同年刊行が開始された国民文庫刊行会からの全訳出版も意識されたのではないかとも思われる。

同様の観点から肯定的あるいは影響を受けたものとして挙げられる「これまで読んだ」日本同時代の作家・作品では、徳富蘆花「自然と人生」（一九〇〇年、民友社刊）、泉鏡花、夏目漱石、森鷗外、志賀直哉『留女』（一九一三年、洛陽堂）、

そして「武者小路氏のものも殆ど全部読んだと思ふ」という（言及順）。「当時の自然主義運動」に言及がありながら、そこに連なる作家の作品が全く触れられていない（「藤村の詩」が挙がるが、そこからは「何等の影響をも受けずにしまつた」と言う）のは印象的である。

○ 大正六（一九一七）年八月三十一日 『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）第四巻 発行（同月二十八日印刷）

◎ 「春城句集」の序

※ 室賀文武の句集に寄せられたもの。当初刊行予定に合わせて大正六（一九一七）年十月二十一日に脱稿された（本文末尾記載）ものようだが、「或る余儀ない事情」（室賀「自序」）のため句集刊行が延期となったため、芥川による序文も大正十（一九二一）年十一月十三日に警醒者書店からの出版と共に世に出るところとなった。以下引用。

予はジャン・クリストフを読んだ時、クリストフの伯父に当る、ゴットフリイドと云ふ行商人が出て来る度に、屢々室賀君の事を思ひ出した。素朴な、力強い信仰に於ても、君は正にゴットフリイドの亜流である。少年のクリストフは、この敬虔な行商人によつて、「銀色の霧が地ときらめく水との上に漂つてゐる」中に、蛙の声と蟋蟀の声と鶯の声とがつくり出す、「自然」の微妙な曲節に耳を開いて貰ふ事が出来た。

芥川が「ジャン・クリストフ」の中でも伯父ゴットフリイトに特に強い印象を持ったことは首藤基澄「芥川龍之介」羅

生門」の構造——『ジャン・クリストフ』と『こゝろ』の受容——」（『キリスト教文学』十七 一九九八年五月）でも指摘があり（なお、同論では「叔父」とあるが、クリストフからみて母の兄であるのでこの表記は不適）この場面からの影響を語っているが、芥川のこの文章に対する言及はない。

○ 大正六（一九一七）年十一月三十日 『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）第五卷 発行（同月二十六日印刷）

○ 大正七（一九一八）年三月八日 『ジャン・クリストフ』（後藤末雄訳 国民文庫刊行会）第六卷 発行（同月五日印刷）
全巻完結

◎ 「あの頃の自分の事」 大正八（一九一九）年一月『中央公論』

※ 「ジャン、クリストフ」がでてくる叙述部分自体は、当時「自分と成瀬との間には、可也懸隔でない友情が通つてゐた」ことを語る一例もしくはその必然的要因としてちよつと言及されているに過ぎない。しかし、本作が単純な回想記でないという前提に立つとき、¹⁴そこでは作家としての現在の自分を作り上げている「あの頃」の思想的背景、芸術観形成素材をも語っているのであり、そこにこうした固有名が出てくることの意味が考えられねばならない。結論から言えば、この文章の末尾が象徴するように、¹⁵事後的に振り返れば作家として出発期に立つ芥川にとって、そこには同時期の創作・芸術観を語る重要な在り方を含むものであったと言つても過言ではないだろう。

ちなみに、同じ節の中では「我々」文学を志望する青年（後の第四次『新思潮』同人）たちの間で「田山花袋氏が度々問題に上つた」こと・そこでの彼が「紀行文家としての」在り方を除いて全否定の対象（同人に一致した見解）であ

ったことが語られている。後の節ではちょうどそれと対比される形で、その頃「將にパルナスの頂上へ立たうとしてゐる」武者小路実篤が言及される。「我々の間でも、屢氏の作品やその主張が話題に上つた。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窗を明け放つて、爽な空気を入れた事を愉快に感じてゐるものだった。」とあるが、これはその表現において古く芥川の文章「ジャン・クリストフ」（大正五（一九一六）年十月『新潮』）と響き合い、また回想される対象としての時期・内容において「私の文壇に出るまで」（大正六（一九一七）年八月『文章倶楽部』）と関聯を持つものである。花袋に代表される、日本型自然主義全盛の文芸界に息苦しきを感じ、そこに風穴を開いてくれたものとして武者小路を見出すこと——と同時に、新時代に文学的出發を果たそうという青年としてそこに全面的に依拠することなく、自らの手で自らの道を拓こうとする芥川16の態度と、その際のきっかけ・あるいはある意味での指針として「ジャン・クリストフ」があつたことが、本作を含む以上三本の回想的文章から窺えるのではないだろうか。

◎「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」 大正八（一九一九）年一月『新潮』

※前半部は「私の文壇に出るまで」（大正六（一九一七）年八月『文章倶楽部』）とほぼ同じ内容である。芥川がわざわざ一年半も前の、しかも書き流し的な文章を探し出してきてまで転載したとは考え難いので、そこで自らが述べていること、即ちその時期における読書遍歴が確かであることを裏書きするものと考えられるだろう。「日本の作家のものうち、志賀直哉氏の「留女」を好きで読んだ。武者小路実篤氏のものも読んだ。」とこの二人を挙げ、すぐ続けて「その頃読んだものの中で、殊に感激させられたものは、ジャン・クリストフであつた。」とある点は、これまで述べてきたことを補強すると思われる。

620 大正八（一九一九）年七月三十一日附 佐々木茂索宛

※「二十三才前後」の（精神的革命）を語る。ゲーテ・トルストイらの「巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時」であり、そこには「ジアン・クリストフの影響大」であったという。因みに満年齢なら、芥川は大正四（一九一五）年に二十三になっており、これまで見てきた通り概ね伝記的事実と合致する。

尚、これに続けて芸術的「感激」が語られる。彼らの作品を読むときに強く感じられるものであり、それが「僕を駆つて創作に赴しむる」ともいう。

697 大正八（一九一九）年十二月二十七日附 佐々木茂索宛より

君もし君の法器たるを知らば深く自ら重んじて文壇に充滿する小乗嘗糞の徒の真似をする勿れ トルストイの禪を拜領して感涙止め難きものは広津和郎の持ち役たらしめよ 成瀬正一にしてロオランの玄關番たるも君の知つた事にはあらざるべし 長与善郎がドストエフスキイの駒下駄を買占めるも彼自身の勝手ならん 佐々木茂索は常に佐々木茂索たらざる可からず

※ 必ずしもロランを批判しているわけではないが、傍線部の表現からは芥川の中でそれが絶対的信奉の対象ではもはやなく、他方変わらぬにそのような態度をとる成瀬¹⁷を、やや距離をとって述べるような態度を示している。次項も参照。

◎「我鬼窟日録」より 大正九（一九二〇）年三月『サンエス』

※ 前年五月から六月にかけての日記を雑誌掲載用に抄出したものである。六月十四日の項に、成瀬正一が来て、「ロオラン曰、芸術の窮る所無限の静なり。プウサンを見よ。ミシエルアンジュの如きは未しと。又曰年長じて愈グエテの大を知ると。」語ったという。それに対する自身の感想としては、「いづれも至極御尤なり。」に留まる。書翰697（前項）の態度に通ずるものがあるだろう。

◎「愛読書の印象」 大正九（一九二〇）年八月『文章倶楽部』

※ 「高等学校を卒業する前後から」の心境の変化として、それまでの「ワイルドとかゴーチエとかいふやうな絢爛とした小説」への嗜好から反転、「ミケエロ・アンヂエロ風な力を持つてゐない芸術はすべて瓦礫のやうに感じられ」るようになり、それは「当時読んだ『ジャンクリストフ』などの影響であつたらうと思ふ」と述べる。「さういふ心持が大学を卒業する後までも続いたが、段々燃えるやうな力の崇拜もうすらいで、一年前から静かな力のある書物に最も心を惹かれるやうになつてゐる」という。具体的にはスタンダールやメリメ、井原西鶴などで、晩年に至るまでの芥川の好みが概ねこの段階で確立していると見てよいだろう。逆に言えば、「ジャン・クリストフ」に対する熱烈な志向性は、こう語る、あるいはこれより「一年前」の時点で完全に終熄していることをこの文章は示している。現に、この文の最後には「此間『ジャンクリストフ』を出して読んで見たが、昔ほど感興が乗らなかつた。あの時分の本はだめなのかと思つたが、『アンナカレニナ』を出して二三章読んで見たら、これは昔のやうに有難い気がした。」とあり、完全な訣別宣言であると言つてもよい。そのことは、697書翰（前年十二月）の態度にも通ずるものである。

尚、この時期に於ける再読が、「雑筆」（大正九（一九二〇）年九月〜翌年一月『人間』）での言及・引用に繋がるの

であろう↓後の項参照。

◎「雑筆——手帳より——」 大正九（一九二〇）年九月十五日『人間』

※ 「雑筆」は断章形式の随想で、この後同誌同年十一月号・翌年一月号の三号に亙って連載された（後二回分のタイトルは「雑筆」）。初回冒頭掲載の「竹田」の項に「竹田は善き人なり。ロオランなどの評価を学べば、善き画描き以上の人なり。」とあるものの、人物評を行うに際してロオランの口吻を一寸借りたというに過ぎず、その人自身への評価ではない。

因みに、この項の末尾に「（七月二十日）」と脱稿日記載があり、前掲「愛読書の印象」と前後して書かれたものか。

○ 大正九（一九二〇）年九月二十日（十二日印刷） 新潮社から豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』刊行開始。全四巻、最終巻は大正十二（一九二三）年六月発行。

◎「雑筆」 大正十（一九二二）年一月一日『人間』

※ 書誌詳細は前掲。一月号掲載分中「理解」の項（前年十一月四日脱稿）に次の一節がある。

ジャン・クリストフの中に、クリストフと同じやうにベエトオフエンがわかると思つてゐる俗物を書いた一節がある。わかると云ふ事は世間が考へる程、無造作に出来る事ではない。何事も芸道に志したからはわかつた上にもわからうとする心がけが肝腎なやうだ。さもないと野狐に墮してしまふ。

「ジャン・クリストフ」の作品内部にまで立ち入ってそれ自体について言及するものではないものの、引かれている部分は第五巻「広場の市」からで、自身が嘗て「創作」（大正五（一九一六）年九月『新思潮』）に於いて利用したところと同じである。再読時にも引かかってくる、彼にとって印象的な部分であることは確かのようなのだ。

○ 大正十（一九二二）年五月二十日（十二日印刷） 豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』（新潮社）第二編刊行。

◎ 「春城句集」の序 室賀文武『春城句集』（警醒社書店、一九二二・十二）

↓ 脱稿日の大正六（一九一七）年十月二十一日の部分にて既述

○ 大正十一（一九二二）年八月十日（五日印刷） 豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』（新潮社）第三編刊行。

○ 大正十二（一九二三）年六月四日（五月三十日印刷） 豊島与志雄訳『ジャン・クリストフ』（新潮社）第四編刊行、全巻完結。

【注記】ここまでで規定上限ページ数に迫ったため、残りの部分は纏めを含めて『熊本県立大学文学部紀要』第二十八巻（二〇二二年三月刊行予定）への寄稿を予定している。芥川側の項目として拾われるのは以下の通りである。

◎ 座談会「家庭に於ける文芸書の選択に就いて」 大正十三（一九二四）年三月『女性改造』

- ◎「僻見」中「岩見重太郎」 大正十三（一九二四）年四月『女性改造』
- ◎「或る恋愛小説―或は「恋愛は至上なり」―」 大正十三（一九二四）年五月『婦人グラフ』（創刊号）
- ◎「新潮合評会（四）」 大正十三（一九二四）年十月『新潮』
- ◎「彼」 昭和二（一九二七）年一月『女性』

1 『生活』七月号の巻末「来月号予告」中に「反逆ロマンラン（五） 光太郎訳」とあるものの、実際に八月号には載らなかった。同号後記である「消息」に高村の言い訳がある。訳文は『高村光太郎全集 増補版』第二十卷（筑摩書房、一九九六・七）が載録するが、同全集別巻（一九九八・四）「年譜」（北川太一編）の著作一覽及び、井口一男「光太郎とロラン」（『立教大学日本文学』一九六一年六月）での紹介には記載にやや不正確なところがある。尚、掲載誌の『生活』は千家元麿（編輯人）、高村光太郎らが中心になって、日本洋画協会出版部から発行された『フェウザン』の後継誌。因みに全く同時期に博文館から同名タイトルの別雑誌が発行されている模様。二号で終わった前者と異なり、こちらは数年に亘って刊行されたようだが、現時点では現物未確認である。本稿の内容とは直接関わらないが、念のため記しておく。

2 注1前掲『高村光太郎全集 増補版』などに拠る。

3 注1前掲論。

4 但し、芥川が同書を読み始めた期日に関して正確なところはわからない。関口安義は『評伝 成瀬正一』（日本エディタースクール出版部、一九九四）において、成瀬が後に翻訳出版した『トルストイ』（新潮社、一九一六）の「序」に「ある時、友の芥川龍之介君が私に一書を示した。それはこの訳書の原著者なる、ロマン・ロオラン氏の『ジャン・クリストフ』であった。二三頁拾ひ読して居る中私は、驚くべき魅力に捉へられて、早速丸善へ行つて長大な『ジャン・クリストフ』を買つて来て猛烈な勢いで読み出した。」という記載と、彼がジルバート・カナン英訳本の第一巻を読了したのが大正三（一九一四）年七月九日であることを以て、芥川の初読を同年初夏としている（九八〜九九頁）。『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、一九九九）では更に踏み込んで「初夏、まだ大学の授業の続く五月末から六月のはじめにかけてのこと」とし、「おそらく途中まで読んだところで、成瀬に感動を伝えたのであろう」（一五六頁）と述べているが、推測の域を出るものではない。芥川の方からの言及を探ると、「あの頃の自分の事」（大正八（一九一九）年一月『中央公論』第

一章（仲間たちと第四次『新思潮』創刊準備中であつた大正四（一九一五）年「十一月」の日々を描く）の中に、成瀬とは「二人とも、偶然同時にジャン・クリストフを読み出して、同時にそれに感服してゐた。」とあり、先の成瀬訳『トルストイ』『序』の記載内容を時期に於いて裏書する一方で、経緯に於いてそれを裏切っている。あるいはこの「偶然」性は、「自分と成瀬との間には、可也懸隔でない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する点が少なくなつた」（「あの頃の自分の事」）ことを特に強調するための小説的演出と取れないこともないが、いずれにせよこの書翰より以前、芥川が「ジャン・クリストフ」を読み始めたことを明確に示す資料は見つかつていない。

因みに、倉智恒夫の芥川旧蔵書書き込み調査報告（芥川龍之介読書年譜——フランス文学関係図書——『比較文学研究』一九八三年四月）に拠れば、読了日は大正四年（一九一五）年四月九日である。

5 デジタルコレクションとして公開されている国立国会図書館蔵本は奥附（刊記部分）を欠くが、関口安義『評伝 成瀬正一』（注4前掲）書には五日とある（一六四頁）。著者「はしがき」に「五月尽日」の記載があること、国会本に「大正4. 6. 19内交」の印があることから、これは確かであろう。

6 後に成瀬正一訳として、新潮社から一九一六年三月にロマン・ロラン『トルストイ』が刊行された。以下の本文記載参照。

7 以上の経緯はグンナー・アールストレーム著／山口三夫訳「ロマン・ロランに対するノーベル文学賞授与の選考経過」（『ノーベル賞文学全集2』主婦の友社 一九七〇・十二）に詳しい。

8 同号掲載の松岡譲「砲兵中尉」は本文冒頭に「前編」、同末尾に「（前編終り）」の記載がある。「後編」が『新思潮』に載ることはなかった。全集本文では「ベエトオフエン」（次行も）だが、ここは初出に従う。

9 この「男」とは「ジャン・クリストフ」では第五巻「広場の市」に出てくる「シルヴァン・コーン」のことである。しかし、作中で彼は純粋な音楽愛好家として描かれており、必ずしもその「聞き方」が特殊であるわけではない。即ち、音楽に対する好尚は強く純であるものの、それに対する素養・理解力の欠如から、その感動を表す表現が不適切なものとして表出されるのだと、語り手あるいはクリストフから眼差されているのであり、「創作」の「僕」の「観方」とは地盤が異なる。

10 加えて言えば、「ジャン・クリストフ」全篇に於て彼は謂わば一点景人物に過ぎないにも関わらず、「僕」が敢えてコーンをこのように取り上げる点も問題となろう。

11 「文芸東西往来」は西洋と日本の文壇ゴシップを中心に、一部批評的言辞を織り交ぜた断簡的文章。しかし、この後の号に出ることはなかった。

- 12 ここでの芥川の、材料自体は描いてその「つかまへ方、書き方」に「敬意を表せずにはゐられない」という行き方は、前々号に載せた自身の「創作」でのあり方と呼応している。別稿にて「創作」を中心に論じる中で改めて検討したい。
- 13 同時期、成瀬が松岡に出した書翰などにその感情の吐露が見られる。関口安義・注4前掲書など参照。
- 14 五島「あの頃の自分の事」論（『藝文研究』第一〇九号 二〇一五年十二月）参照。
- 15 前注に同じ。
- 16 「当時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつた。」と同文中で述べられている。なお／あるいは、この部分を含め「あの頃の自分の事」における同人仲間を指す「我々」という表現が時に「自分」の代わりに用いられている、即ち実際に当時共有された認識を語るとき以外に、当時もしくは（この文章を執筆する）大正七年末時点における芥川個人の認識を語る際にも使われているという可能性に関しては、拙論（注14）にて指摘した通りである。
- 17 成瀬正一のロランへの入れ揚げぶりについては、関口安義「成瀬正一の道程（I）―ロマン・ロランとの交流―」（『文教大学』文学部紀要』二〇〇五年九月）などに詳しい。

【附記】本稿は国際芥川龍之介学会（I S A S）第十五回大会（二〇二〇年十二月十九・二十日 オンライン）及び、熊本芥川研究会例会での発表内容の一部を再構成したものである。今回の調査にあたり、熊本県立大学図書館において他館資料取り寄せサービス今年度御担当の清水さんに大変お世話になった。ここに記して謝意を表したい。注1記載の雑誌『生活』の二種存在に関してなどは、そのやり取りの中で判明したことである。

所謂コロナ禍で、（特に地方から）域外への調査旅行ができない、あるいは首都圏などでも施設の利用制限によって、文献資料へのアクセスにおいて大変支障を来しているとの声を研究者間で聞くことが多い。一刻も早く煩わしい条件抜きでの移動の自由が戻ってくることを強く願っている。

※引用文中、漢字は通行のものに改め、ルビは適宜省略した。